

いの流水俳壇

松尾 満津於選

「当季雑詠」

新春の海の色もつ一夜千し

間 浩太

〔評〕この句は情景のよくわかる句であるので、一月の流水句会でも最高点で選ばれている。それはその通り夫々の解釈でよいと思うのだが、敢えて注釈するならば「新春」は正月のことであり、春節を表す季語とはならないということ。つねひごろと全く変らない海であつても、年が改まるというだけで、何故か新鮮に思えてくる心象の変化は万象につながる。「新春の海」とつなげるか、「新春や」と切れ字の助詞で「海の色もつ一夜千し」とするかで内容が変わることに留意が必要ではなかるうか。

健康が宝ですよと初鏡

川村 博子

〔評〕初鏡は新春になつてはじめての化粧に向う鏡のことである。この句は現在より寧ろ過去に流れた時間、を感じながら鏡台に向つて自問自答しているのでは

る。少し頬が瘦せたかな、顔の皺がだんだん増えてきた、運動不足、栄養のバランス。鏡は正直に応える、「何事につけても健康に勝る宝はありませんよと：。」

今しがたまでの雪山ご来光

川上こよね

〔評〕ご来光というのは、高山などの頂上でおがむ日の出のことであるが、雨が霽みぞれになり、やがて雪になる、そして急に日和に変わつて太陽が顔を覗かせる、十二月の頃よく見かける現象である。よくある情景であるので、この現象を指しているのであろう。寒さに震えているときであるだけに、太陽のぬくみは何よりも有難く思えるのである。

年重ねつつも春待つ心意気

津田 久美

〔評〕冬に入ると、春が来るのが待ち遠しいのは、老人に限らず誰しも感ずることであるが、この句の心意気はすばらしい。「冬が過ぎれば春が来る!!」と歌手「氷川きよし」の「ソーラン節」にもある。年重ねつつもひっそりとした佇まい。春待つ心、あの人ならなるほどそうかも知れないと、同感するであろう。忍耐強い意志、すべてが自信につながる。

初暦家族行事に朱の印 井上 郁子

恙なく八十路半ばや屠蘇を酌む 森元二 美子

やわらかき土の重さよ春隣 刈谷 志津

年の差と中味の格差お年玉 大川 節弥

七草を摘み来てくれる夫であり 竹崎 光子

菜の花のほかに甘き苦みかな 秋田 律子

輝ひび荒れの手を見て老を思ふかな 森岡 照月

長き緒の鈴の音冷えて杉の杜もり 友草 水月

息災と記しるせしみの初日記 岡本とも子

柚子しぼる香りに酔ひぬ一日かな 中野よし子

輝ける初日を拝す今春かな 川村千囿子

冬ざれの野を駆けてゆく特急車 楠目 哲郎

紙の町えびす大國年明け 小島 良

縄跳びの波くぐりけり風邪マスク 片岡 包女

意地張つて生きて独りや根深汁 伊藤 たみ

棚田荒れようやく春の月かかる 渡辺まり子

初日の出なりふりかまわず手をあわす 筒井 文

初雪やこれはこれはと立ち竦すくむ 川村 愛

餅つきて手の温もりを曾孫より 弘瀬うき子

母と子と白足袋そろふ札所かな 筒井 一平

休田や一面に立つ霜柱 筒井 眉躬

毛絲編む猫に一瞥しておりぬ 松尾満津於

次 題 「当季雑詠」
締め切り 毎月15日

投句先

吾北教育事務所 上八川甲2010

☎ 867-2133

今月のこども川柳

ふゆの花 ふきのとうだよ きれいだね

下八川小1年 曾我はるか

さむいふゆ こたつの中は あったかい

下八川小1年 杉本みやび

